

Aichi University

Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY
No.12 July 2018



『流れ込む』(100号、板取川)、青木年広・画：一水会委員・日展会友・彩日会招待教授

CONTENTS

<特集> 古典を撫でる

・肉聲、その言葉と形	経済学部	伊藤 勳	2~3
・ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』	文学部	河合まゆみ	3~4
・子どもと古典	国際コミュニケーション学部	吉本 篤子	5~6
・古典を撫で、古典に撫でられる	文学部	宇佐美一博	6~7
・漢詩を「撫でて」みませんか？	文学部	三野 豊浩	7~8
・蘇州・寒山寺と浜松・舘山寺 一張継「楓橋夜泊」の詩碑	文学部	白田真佐子	8~10
・タイ古典文学を撫でてみよう！	国際コミュニケーション学部	加納 寛	10~11
・『源氏物語』の翻訳ー国際化の時代の日本古典文学ー	文学部	和田 明美	12~13
・古代ギリシア哲学の未来	文学部	伊集院利明	14~15
・古典を撫でる「アクタ・サンクトールム(聖人伝)」	文学部	小野 賢一	15~16
・ロシア古典作品を撫でる~トルストイ作「戦争と平和」~	経済学部	清水 伸子	16~17

<学生> 学習体験記

・ある先生の言葉	国際コミュニケーション学部3年	迫田 篤志	18
・中国語を学んで	経済学部2年	垣野 紗輝	18~19
・フランス留学を体験して	文学部4年	今牧 千晶	19
・フランスセミナー報告書	文学部3年	宮脇 巧	19~20
・異文化にふれて	文学部3年	菊山 紋加	20~21

<エッセイ>

・ことばの旅ー「自由」という語についてー	経済学部	葛谷 登	21~23
----------------------	------	------	-------

2017年度(第23回)外国語コンテスト結果報告

豊橋ランゲージセンターに行ってみよう！	24~25
---------------------	-------

2018年度外国語検定試験奨励金のご案内・編集後記	26~27
---------------------------	-------

	28
--	----



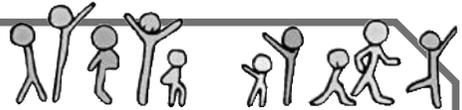
特集のことば

愛知大学は人文系と社会系を合わせた文系の総合大学です。人文系の精粹は古典です。古典の知識はグローバル化時代の教養としてもますます必要になって来ています。

今回は人文系の古典に焦点を合わせてみたいと思います。巷間には古典は難解という印象があります。古典に慣れ親しむためには「古典を撫でる」ことが一つの道ではないでしょうか。

「古典を撫でる」とは、幼子が眠っている大柄な犬の頭を撫でると、その犬が優しく目を見開きまた物憂げそうにすやすやと寝入るような体験をすることをイメージしています。

肉聲、その言葉と形



経済学部 伊藤 勳

「あらゆる作家と作品に、肉慾以外のもので結びつくことを肯んじない」と、オスカー・ワイルドにその窮極的な対象を見出したのは、三島由紀夫である。恰も古代ギリシアにおいて二人の友人が友誼の印に二に割った硬貨や骰子などを双方が持ち合つたシュンボロン即ち割符の如く、三島は世紀末の寵児ワイルドに藝術家として一致契合する得難い相性を見出したのであつた。

三島が自分の目で選び自分の所有物としたのは、他ならぬワイルドの『サロメ』であつた。「私達は肉聲に帰らねばならない」といふワイルドの主張は、まさにこの作品において藝術として形象化された。肉聲とは言葉本来の意味に立ち返り、多義的な曖昧さに曇らされず心象喚起力に長け、言霊と言ふべき律動的な生命的音楽性を宿した言葉を言ふ。十九世紀の西欧は即物的表現が衰へ、自由、平等、博愛等々、様々な觀念ばかりが先走り、言葉の意味が曖昧になりその生命力が衰頹した時代である。言葉は明確な輪廓をもつた形を描き出す生命力を失つた。

形は同時にその作者の心を反映する。『サロ

メ』の中で、姿を見せぬままに、牢獄の暗闇から朗々と響き渡るヨカナーンの聲は、単純な内容を言葉を替へながら繰返し、一つの様式と化してゐる。「様式の繰返しは人に安らぎを与へる」と言ふワイルドは、様式の持つ効果を熟知した上で、その技法を駆使してゐる。様式化即ち形を与へられた言葉には、律動する赫奕たる生命力の輝きがある。肉聲の美しさはこの作品にとどまらない。同時代の批評家A・シモンズは、『『獄中記』は聲に出して読むべきである。その流麗さは肉聲を顧慮したものであり、黙読するとこれらの澄んだ言葉に殆どあるやうには見えない美しさが、聲に出すと顕れてくる』と評した。因みにワイルドはアルフレッド・ダグラスとの同性愛の嫌で、重労働を伴ふ二年の刑を宣告され、レディング刑務所に投獄された。『獄中記』とは出獄直前、当局の特別の計らひを得て、ダグラス宛に書き綴つた書翰である。

精神形態としての様式の確立によつて成し遂げられたワイルドの肉聲としての流麗な言語表現は、三島の美意識を虜にするものであつた。そして終には昭和三十五年、文学座により三島

の演出で『サロメ』の上演がかなふことになった。刮目すべきは、三島が日夏耿之介の『サロメ』訳を台本に選んだことである。その理由は、「この字面のむやみとむづかしい翻訳が、耳から入つて来ると、實になめらかに、わかりやすいセリフ」になつたからである。音読すると「力があり、リズムがあつて、直に心に觸れて来る名譯」だと言ふ。耿之介にはワイルドの文体の魂を日本語に移し替へるだけの技倆が具はつてゐた。「かたちに因つて、こころを忍ばん」とする藝術観をもつ耿之介は、「詩技の事は稟性神賜」と心得、「民主的時代の衆民は心より藝苑に至るの道知らぬ誚はれた思想上の賤民」であると断じた。かうした言葉には、「藝術を最高の現実」として扱い、「我々に関はらないもののみが美しい」と言つたワイルドの反響さへも感じられる。殆どワイルドと揆を一にする藝術的立場を取る者にして初めて成し得た訳業であつたと言へる。

かつてウォルター・ペイターの『ルネサンス』をスウィンバーンの詩の一節を借りて、「精神と感覚の黄金の書、美の聖典」と称揚したワイルドはなほも後年獄中で、「私の人生にかくも不思議な影響を及ぼしたあの本」と、『ルネサンス』の及ぼした薫習の深さを追懐したのであつた。ワイルド藝術はペイターの藝術思想に培はれ開花を見た。その根本的思想は何かと言へば、古代ギリシアのエピク로스哲学に他ならない。キリスト教とは全く相容れないエピクロス思想は、人生観としては十六世紀になつてフランスのモンテーニュの『隨想録』において甦へり、その原子論は十七世紀前半、同じくフランスのピエール・ガッサンディによつて掘り起こされニュートンもそれを受け継いだ。藝術思想としては十九世紀後半英国のペイターによつて復活したのであつた。その中枢をなす考へ方は、感覚に従つて見るべし、自然に服従すべし、心境の平静即ちアタラクシアを保つべし、この三点に尽きる。日本人にとつては当たり前の思想でも、キリスト教社会においては、ペイターは異端者として疎まれ、ワイルドは社会から抹殺された。

ワイルドと肉慾で繋がつた三島は、当然ペイターと無関係ではあり得ない。ゆくりなくも「不

思議な影響」の源に踏み入つた。『ルネサンス』に代表されるペイター藝術は、ゲルマン的象徴思考とギリシアの合理主義思考との融合形態の実現を目論むものである。三島は『貴顕』においてペイターに倣ひ、「微妙な寫實と透明な抽象性」とが入り混じりつつ、最終的には明確な輪廓を結ぶことのない表現形態を試みたのである。とまれ、三人共に偽善の社会に厳格な言葉の形を示しつつ、なほも形なるもの無であることを明らかにした。



ドイツ文学を代表する文豪といえば、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテである。そのゲーテが24歳のときに書いたのが『若きヴェルテルの悩み』で、1774年に出版されるやドイツで大ベストセラーとなり、各国語に翻訳され、ゲーテの名をヨーロッパ中に知らしめることとなった。かのナポレオンもこの本を愛読したそうである。一般には「恋愛小説の古典」と見なされているが、そこで描かれているのは単なる恋愛にとどまらない。

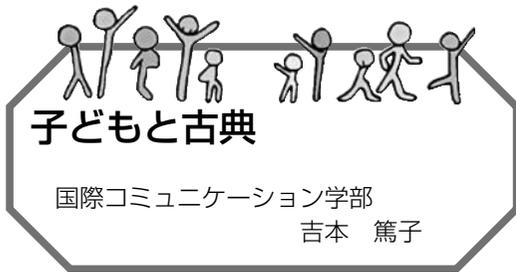
この作品は、主人公ヴェルテルが友人ヴィルヘルムに宛てた手紙からなる書簡体小説で、読者は作品を読みながら、恋する主人公の喜びや苦しみをともに味わうことになる。まず作品の前半、ヴェルテルは、訪れた地方の町でロッテという女性と出会い、たちまち心を奪われる。彼女にはすでにアルベルトという婚約者がいたが、不在であったため、ヴェルテルはますます彼女に魅了されていく。彼女は、亡母に代わり家事をこなし、幼い弟妹の面倒を看る家庭的な明るい娘であった。ロッテが舞踏会のための服装で弟妹たちにパンを切り分けてやる象徴的な場面は、後述するオペラや映画でも必ず登場する。またロッテは、当時の女性にはめずらしく、

読書を好み、自分なりのしっかりとした考えを持っていたことも、出会った当初のヴェルテルを驚かせた。そこに婚約者アルベルトが戻ってきて、いわゆる三角関係になる。このアルベルトが嫌な奴であったらヴェルテルにもまだ救いがあったのかもしれないが、彼は非の打ち所がない人物だった。落ち着きのある性格といい、出世を約束された立場といい、ヴェルテルとはまさに対照的であった。二人の間に自分が入り込む余地はなく、しかしロッセへの恋心を抑えることのできないヴェルテルは逃げるようにその地を去る。以上、作品の第一部はほとんどがゲーテの実体験をもとに書かれている。大学での学業を終えたゲーテは、父親の命で、帝国大審院での実習のため田舎町ヴェッツラーへ赴いた。そこでロッセのモデルとなったシャルロッセ・ブッフと知り合い、恋に落ちた。彼女には許婚のケストナーがいることを、ゲーテは知らなかったのだ。このケストナーは優れた人物で、当地でのゲーテの友人であった。シャルロッセへの思慕の情を抑えきれなくなったゲーテはひそかにヴェッツラーを去るが、この二人との交際はその後も続いた。

物語の後半、ヴェルテルは別の土地の公使館で秘書として働き始めるが、上司も同僚も官僚主義にこりかたまつた俗物ばかりで、ただ耐え忍ぶばかりの日々を過ごす。唯一親しく付き合い合えた伯爵のもとでも、彼は侮蔑的な身分差別に会う。ついに退職を願い出たヴェルテルは、失意のうちにロッセのところへ戻ってくるが、彼女はすでにアルベルトと結婚しており、以前のような付き合いは考えられなかった。周囲の人たちとの溝が深まり、精神的に追い詰められたヴェルテルは、クリスマスの前日、ついに感極まってロッセにキスしてしまい、もう二度と会わないと宣告される。その夜、彼はアルベルトから借り受けたピストルで自殺するのだった。作品のこの第二部では、恋愛よりも社会批判が主題となっている。当時はまだ厳格な階級社会で、ゲーテと同じく市民階級出身のヴェルテルは、身分の壁や旧態然とした官僚主義に突き当たり、死へと追い込まれていく。キリスト教では自殺は許されないことであった。ヴェルテルとアルベルトが自殺について言い争う場面

があるが、自殺は人間の弱さにすぎないと切り捨てるアルベルトに対して、その情熱が限度を越えると人は死なざるを得ないとヴェルテルは真っ向から反論する。現実のゲーテは、もちろん自ら命を断つことなく、恋の苦悩を作品に書くことで昇華し、内面の危機を克服した。ゲーテがヴェッツラーを去った後、大学時代からの友人であるイエルーザレムが、人妻への恋にやぶれ、ケストナーから借りたピストルで自殺するという事件が起きた。この出来事にヒントを得てゲーテは作品を完成させたのである。この作品が世に出ると、前述のように大反響を引き起こした。ヴェルテルと同じ服装が流行り、彼をまねて自殺する若者が多くあらわれ、一時は出版が禁止されもした。当時の閉塞した身分社会、キリスト教社会に追い詰められた若者たちにとって、この作品は束縛からの解放を意味したのである。現在、古典として『ヴェルテル』を読む皆さんは、当時とは全く異なった時代、社会に生きているわけだが、自分の心情のみに従って生きようとするヴェルテルの姿に共感できるところがあるはずである。

この作品は、うれしいことに、映画やオペラでも楽しむことができる。2010年の映画化『ゲーテの恋』では、ヴェルテルがゲーテ自身と設定され、ゲーテとロッセは相思相愛になって一度は結ばれる。原作の第二部が第一部に混ぜ込まれ、恋敵のケストナーがゲーテの上司という設定になっているのも面白い。当然、主人公ゲーテは自殺の寸前まで追い詰められても、実行はしない。映画の結末は、『ヴェルテル』が世の注目を集め、ゲーテが作家として一歩を踏み出すというハッピーエンドである。一方、フランスの作曲家マスネによるオペラ『ヴェルテル』も有名である。セリフがフランス語なのが残念であるが、多くDVD化されているので、舞台演出の違いを見比べるのも楽しい。オペラと原作の大きな違いは、ロッセが最初からヴェルテルに恋愛感情をいだいていて、結末、ピストル自殺を図り血まみれのヴェルテルに、ずっとあなたが好きであったと告白することである。こうした映画やオペラを通して、古典の新しい魅力を発見するのもおすすめである。



古典は、過去の人々が積み重ねてきた知的活動の宝庫だ。19世紀末のドイツでは児童書出版の拡大と義務教育の普及によって、子どもたちも本に接する機会が増えた。しかし子どもたちは児童向けの通俗的な娯楽書を好みがちで、多くの大人たちも、子ども、とくに民衆層の子どもに古典は必要ないと考えていた。それに異議を唱え、子どもたちに古典を読もうとはたらきかけたのが、当時のドイツで広まった児童書運動だった。

児童書運動の主導的立場だった民衆学校(Volksschule, 今の小学校から中学校くらいまでの年齢の子どもが通った) 教員ハインリヒ・ヴォルガスト(Wolgast, Heinrich 1860-1920)は、当時よく読まれていた児童文学を批判し、古典や良質な文学作品を読むよう教育することを主張した。教員たちは書評紙「児童書の守護者(Jugendschriften-Warte)」を創刊し、そこでゲーテやシラーの詩などの古典のほか、グリムやアンデルセンのメルヒェンや地域の説話のような、長く受け継がれてきた物語を読むことを勧めた。メルヒェンや説話を含めた古典が作品とし



ヴォルガストが編纂したシリーズ本。小さくて子どもも手に取りやすい。第1巻はグリムのメルヒェン。

て優れており、読書の力を養う上でも有益だと考えていたからだ。さらに彼らは出版社と提携して安い児童書シリーズを出版し、良質な本を子どもが手にしやすい環境をつくろうとした。

しかし実際には、民衆層の子どもにとって、古典を「撫でる」ように、軽やかに慈しむように読むことは容易ではなかった。子どもたちが好んでいた通俗的な少年向けの冒険小説や少女向けの夢見がちな物語文学の方が、古典よりもわかりやすさや面白さの点ではなじみやすかった。しかしこれらの通俗物語では読書の力は育たないと教員たちは考えていた。冒険物語を読む少年たちは、登場人物の冒険の派手さに目を奪われてどんどん読み飛ばしてしまい、じっくり読まないで、判断力が育たない。少女文学を読む子どもたちは、あまりに現実からかけ離れた夢のような恋愛物語にうっとりしてしまい、現実感覚が養われない。これらの物語は実際に粗も多く、読書によって育成されるべき判断力や現実感覚などの能力を身につけるうえでかえって邪魔になると考えられていたのだ。

そこで教員たちは、なじみにくい古典文学作品を子どもたちが読んで楽しめるように、様々な工夫をした。たとえば、子どもの発達段階に合わせて読み、少しずつ古典に慣れ親しむことをめざした。まずは親が子どもに詩を読み聞かせたのち、子どもが自分でメルヒェンや説話から読み始め、その後、長い物語文学を読むことを勧めている。

ヴォルガストは、古典のなかでも子どもが自分で読めるものを選び出し、原文のまま読ませることを重視していた。芸術的能力をもった作者が書いた文章を直接楽しむことが大事だと考えていたので、子どもが読みやすくするための改作は良くないと思っていた。なぜなら、芸術的に優れた作品には独自のリズムがあり、そのリズムが子どもの理解を助けるからだ。子どもに分かりやすくするという善意の意図によるものであっても、改作はその文章のリズムを壊してしまう。ヴォルガストが編纂した『母と子どものための 古来の美しい子どもの詩集(Schöne alte Kinderreime für Mütter und Kinder)』をみると、子どもが親しみやすいリズムを大切にしていることがよくわかる。



『母と子どものための 古来の美しい子どもの詩集』。
愛らしい天使の絵など、美しい挿絵も充実している。

それにしても、なぜ彼らは子どもたちに古典を読ませようとしたのだろうか。判断力や現実感覚を養うだけであれば、古典でなく同時代の作品でも十分可能ではないかと疑問を感じる人もいるかもしれない。その主な理由は、古典や彼らが薦めた文学作品が、優れたリズムのような形式とともに、自分たちの共有したい内容をもっているからだ。古典の持つ世界を「教養」として、世代や階級を超えて共有することに意味があると考えていたのだ。

では、私たちが共有する必要のある教養とは何か。ここでドイツを離れ、日本で子どものために書かれた詩である童謡を例に挙げてみよう。「ぞうさん」や「お正月」、「シャボン玉」など、私たちの多くが知っている童謡は、明治、大正時代以来、歌いつがれ、今や古典となりつつあるとっていいだろう。これらの詩は簡潔ながら、私たちの普段の生活や心のありようを共有する世界をあらわしている。歌ってみると、私たちは誰もが感じる日常の喜びを共感したり、ふとしたときに見つけた美しいものを思い出したり、文化的行為をともに味わったりすることができる。教養とは、なにも立派で難しいことを知っていることだけではなく、このように「私たちの世界」として理解し共有できるものでもある。優れた童謡や古典文学は、そうした教養となる世界をもっている。子どもが読み口ずさむことによって、作品世界を過去の人々から受け継ぎ、また次の世代につないでいくことができる。だからこそ、新しい世代としての子どもが古典を読むことの意義があるのだろうと思う。



古典というと、東アジアでは、経学や歴史、諸子の書、さらには詩や散文など文学の書で、現在まで読み継がれている書物がそれに当る。古典を重んじるのは、唐の太宗が「古を以て鑑と為す」を三鑑の一つにしたように、古を鑑とする考え方と深く結びついている。

さて、「古典を撫でる」とはどういうことなのか、と問われたときどう答えたらよいだろうか。古典を楽しむ者にとって、自分と古典との関係は、どのような関係なのか。故事成語に「尚友」という言葉があるので、これを手がかりに考えてみたい。

『徒然草』（第十三段）に、古典を読む楽しみについて次のように述べている。

ひとり、灯の下にて文をひろげ、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。

この後に、『文選』、『白氏文集』、『老子』、『莊子』、日本の博士が書いたもの、それが古典として挙げられている。吉田兼好のこの文章は、『枕草子』（二百十一段）に触発されたものであるが、いずれも中国の『孟子』（万章下）の「尚友」を踏まえている。「尚」は上の意で、古にさかのぼって古人を友とするという意味である。孟子は弟子の万章を論して次のように言っている。

一郷の善士は斯ち一郷の善士を友とし、一國の善士は斯ち一國の善士を友とし、天下の善士は斯ち天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て、未だ足らずと為し、又尚りて古の人を論ず。その詩を頌し、その書を読むも、その人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ずるなり。是れ尚友なり。

古人の作った詩を吟じ、その著書を読んだだけではその人物のことはよくわからない。さらに遡って行ってその古人の活動した時代をよく知り、古人と一体になってその時代を生きてみ

る必要がある。そうして始めて古人の人となり、詩や書の意味が理解できるという。

重要なのはこの後である。古代に留まったままでも、現実から逃避して一時的に自分の心が癒やされることはあるであろう。しかし、古人に友として認めてもらうには、また自分が生きている現代まで戻ってきて、古人今ありせばどのようにするであろうかと考えなければならない。古典の中に自分を見て、自分の中に古典を見る。現代の世界に身を置きつつ古典的なものを取り込み、古典の世界に分け入りながら、現代へとつながる線を見つける。過去をただ懐かしむのでもなく、新しい時代を否定するのでもなく、時代のはざまで自分の立ち位置を見つけ、そこから現在と未来を逆照射してみる。『論語』の有名な「温故知新」(為政)である。渋沢栄一もこの条の解説の中で、伝統的な考え方と欧米の新しい考え方の両方とも生かすような形でどうバランスをとるかが今日的課題であると述べている(『論語講義』)。東洋哲学的な概念で言えば、「中庸」の追求と言ってよい。新井白石もこのことをとくに強調した。白石は、「天下有用の学」に心を惹かれ、徳川家宣に奉った「進呈の条」の中で、「いにしへを知るといへども、今を知らざれば所謂春秋の学にあらず」と力説している。江戸幕府の教育の中心、昌平黉の教授であった佐藤一斎も、「分を知り足るを知るは、過去を忘れざるに在り」(『言志晩録』)と言い、古典を通して過去を知る重要性を喚起した。そして読書も心学だとし、冷静、沈着、入念、謙虚な態度で読むべきだと言い、孟子の「尚友」に対して次のように説いている。

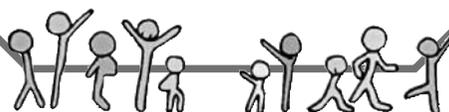
孟子、読書を以て尚友と為す。故に経籍を読むは、即ち是れ嚴師父兄の訓を聴くなり。史子を読むも、亦即ち明君賢相、英雄豪傑と相周旋(応接の意)するなり。其れ其の心を清明にして以て之に對へざるべけんや。(『言志後録』)

一斎の解釈には、中国における経学成立以降の考え方、及び江戸時代の幕藩体制の影響が色濃く窺われ、教師と生徒、父と子、君と臣など、縦の関係が強く打ち出されている。しかし縦の関係では古典を撫でることは困難である。孟子の場合は、善士と善士の関係、いわば横の関係

であった。友人との関係については、孔子も、「子曰く、己に如かざる者を友とするなかれ」(学而)のように、重要なテーマとして取り上げ、その関係について、「朋友と交わりて信ならずや」(学而)のように、お互いの信頼関係が基礎にあるとする。「尚友」は、基本的には横の関係であり、気が置けない、信頼に裏打ちされた関係である。これなら古典を撫でることができる。古典を撫でて学ぶ中で現代に通じる水脈を探り出し、現代において自分の立ち位置を考える。いい立ち位置を見つけ、きっと古典も褒めてくれるだろうと思えたとき、私は古典に撫でられた気分になる。私が古典を撫でたり、古典が私を撫でたりするのは、お互い敬意を表しつつ信頼に裏打ちされた友人関係があるからである。

漢詩を「撫でて」 みませんか？

文学部 三野 豊浩



中国の古典文学が専門なので、一筆書かせていただくことにした。

古典を「撫でる」というのは、実に面白い表現だと思う。今では死語かも知れないが、『詩経』に由来する「切磋琢磨」という四字熟語がある。玉や石を刃物で切り、やすりでこすり、槌で打ち、砥石で磨くように、日々努力精進することをさす。少なくとも、かつては定番の四字熟語だった(ように思う)。そのように、私の感覚からすると、漢詩や漢文というものは決して「撫でる」ものではなく、一文字一文字、ノミか何かで彫ったり、削ったり、刻んだり、あるいは挟ったりしながら読み解くものである。ある程度の専門家にとっても、漢字の手ざわりは決して仮名文字のように柔らかいものではなく、基本的に固くごつごつしたものである。そんな漢字ばかりで書かれた文献を読み解くことは、ある意味で大きな石のかたまりを相手に悪戦苦闘しているにも等しい。しかしそれだけに、古典を「撫でる」という表現に興味をひかれた次第

である。つい前置きが長くなった。

とはいうものの、そこは何といっても悠久の歴史を誇る中国である。何千年にも及ぶ時間の中で蓄積されて来た膨大な文献の、一体どれだけを自分はちゃんと読んでいるだろうか。一生懸命に研鑽したつもりでも、果たして本当に「刻んだ」と言えるほどの業績が自分にあるだろうか。私の仕事など、それこそ岩のような古典の表面を軽く「撫でた」程度に過ぎないのではないか。そう思うと、何だか無力感にとらわれてしまう。

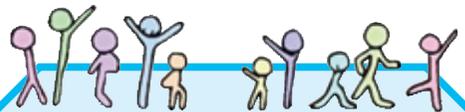
閑話休題。かつて所属していた中国語中国文学専攻が廃止となり、無念やる方ない思いをしたのは、そう遠い昔の話ではない。専攻の維持に必要な十分な学生が集まらないことが廃止の主な理由だったが、その時はこれも時代の趨勢とあきらめざるを得なかった。万事スピーディーで効率重視の現代社会にあつては、ゆっくり時間をかけて難しい漢詩や漢文を学びきわめたところで何になろう。実用性のない不要不急の専攻に人が集まらなくても仕方がない。そう自分に言い聞かせたものだった。

だが、「今の若い人たちは漢詩や漢文にまったく興味が無い」と決めつけてしまうのは、早計だったかも知れない。専攻は失ったが、現在私は豊橋校舎で主に初級中国語と初級中国文学の科目を担当している。毎週火曜日の午後に「古典の世界」という共通科目があり、ここ数年同じテキストを用いて「春眠 暁を覚えず」といったポピュラーな漢詩の話をしている。その受講生が年々増加傾向にあり、今年度は110名を超える学生たちが私の講義に集まってくれているのだ。何とも喜ばしい限りである。だが待てよ、これは一体どういうことなのだろうか、とふと考えてみた。もしかすると、かつての私のように中国の古典をとことん究めたいなどという学生がほとんどいなくなった一方で、それこそ「撫でる」程度になら漢詩に親しむのも悪くないかな、と考えている学生は、案外少なくないのかも知れない。それならそれでまことに結構。若い諸君には、是非とも価値ある古典に親しんでいただきたいものである。こちら元気でいられる間は紹介の労を惜しまないので。

最後に。自己宣伝めくが、このほど初めての

単著を幻冬舎ルネッサンス新社という所から出していただけることになった。タイトルは『范成大詩選』。秋頃発行の予定である。一般に漢詩の中で最も人気があるのは唐代(618~907)の詩で、私も授業では主に唐詩を扱っている。それに比べ宋代(960~1279)の詩はそれほど人気がなく、紹介される機会も少ない。宋代はさらに前半の北宋と後半の南宋に分けられるが、南宋は北宋以上にマイナーである。范成大(はん・せいだい 1126~1193)はその南宋の重要詩人の一人であるが、これまでその作品が一冊にまとまった形で紹介される機会がほとんどなかった。そこで自分なりに彼の詩を読み込み、試行錯誤の末、その成果をまとめてみた次第である。全部で五つの章から成り、詩人の生涯をたどりながら、各時期の代表的な作品を紹介して行く。ある程度専門的な内容も含まれているが、一般の読者にも面白く読んでいただければと思い、なるべく親しみやすい作品を選び、通常の訳注の他に七五調の自由訳を添えるなど、工夫をこらしたつもりである。少しでも多くの人に范成大という人物とその作品を身近に感じていただければ幸いである。書く方はそれこそ身を「削る」思いで執筆にあたったが、「撫でる」程度にでも楽しんでいただければと思う。

とりとめない雑談のようになってしまい恐縮である。字数制限もあることゆえ、こゝらで筆を擱くことにしたい。



蘇州・寒山寺と浜松・舘山寺 —張継「楓橋夜泊」の詩碑

文学部 白田真佐子

豊橋校舎で「言語と文化」という共通科目を担当しており、テーマは中国の言語と文化です。受講生は中国の言語や文化に興味があつて選択したとは限りません。むしろそれとは逆、あまり興味はないけれど、履修することにしたという場合も多々あります。もちろん中国には行ったことはないし、行く予定も今のところはなし。



蘇州・寒山寺・「楓橋夜泊」詩碑（2012年夏）

そういう人が大半です。そういうわけで、私自身が中国や台湾、そして日本で写してきた写真を教材として用いています。

「中国の古典と名所旧跡」というテーマで蘇州（中国江蘇省）を取り上げることがあります。1981年秋友好訪中団に参加、初めて蘇州に行き、1990年上海留学中、列車に乗って数回日帰りで行きました。当時特急ですと上海から片道1時間くらい、市内には庭園やお寺、名所旧跡が多数あり、古い街の雰囲気が入り、それ以降も折にふれて訪れています。寒山寺にも何回か行きましたし、寒山寺の名を聞いたことのある日本人も少なくないと思います。寒山寺の創建は中国南朝の梁代の天監年間（502-519年）で、当時は妙利普明寺という名称でした。寺の変遷については『寒山寺』（劉啓明編著、蘇州大学出版社、2001年、6-19頁）に詳しく、長い歴史を持つ古刹です。寒山寺にちなむ詩として、授業では張継（唐代の人、生没年不明）「楓橋夜泊」という詩をよく取り上げています。

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼いて霜天に満つ
江楓漁火對愁眠 江楓漁火愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外の寒山寺
夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲客船に到る

授業では漢詩の解釈が中心ですが、私が写して

来た写真やその他の資料をスクリーンで投影して、寒山寺や蘇州の街の雰囲気を感じてもらおうよう、試みています。それでも、異国の風景は自分で見るのが一番です。日本にいても、何か中国に関係する風景はないでしょうか。今回は解釈というよりも日本にいても見ることのできる石碑を中心に紹介したいと思います。

浜松の館山寺は名前が似ていますが、実際蘇州の寒山寺と交流があるのです。2017年春先、NHK大河ドラマに湧く浜松に行き、館山寺を見学しました。平らな場所にあるのかと思いきや、小高い丘というか低い山にあるのには驚きました。まさに百聞は一見に如かずと言えます。境内には「楓橋夜泊」の詩碑があり、これは寒山寺にあるものと同じです。詩句は愈樾（1821-1907、中国清末の学者）の揮毫によるもので、それを石碑に刻んでいます。寒山寺と館山寺という名称の類似から、伊藤博文（1841-1909）が蘇州の寒山寺と浜松の館山寺に同じ鐘を贈りました。後に日本の館山寺の鐘は戦争中失われてしまい、蘇州では保存されていた鐘をもとに、再び鑄造したものが館山寺にあり、それも見て来ました。

館山寺にある「楓橋夜泊」の詩碑には次のような説明板が掲げてありました（原文は縦書き）。

当浜名湖館山寺と中国寒山寺友好記念
「楓橋夜泊」詩碑

張継詩 館山寺温泉開湯五十周年記念事業
愈樾書 発起人 館山寺温泉観光協会



蘇州・寒山寺・鐘樓（2012年夏）

この詩碑は中国蘇州寒山寺境内に建っている有名な「楓橋夜泊」（張継詩・愈樾書）の石碑。当館山寺と寒山寺は平成十八年九月六日友好提携を結び、その記念として、中国寒山寺境内に建っている詩碑をそのまま複製し、平成十九年五月十六日建立。

この後に伊藤博文が明治三十八年に同じ梵鐘を寒山寺と館山寺に贈ったことが書いてありますが、紙幅の関係で省略します。最後に「浜名湖畔 曹洞宗館山寺」と記されています。

今は寒山寺のホームページ（中国語版）、館山寺ホームページもあり、パソコンやスマホからアクセスできますが、やはり実際に行ってみたら、何か発見があるかもしれません。

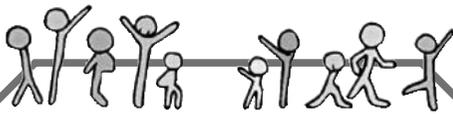


浜松・館山寺「楓橋夜泊」詩碑
(2017年早春)

<http://www.hanshani.org/news/> 寒山寺HP（中国語版）

<http://kanzanji.net/> 館山寺HP

(2018年5月1日現在のアドレス)



タイ古典文学を撫でてみよう!

国際コミュニケーション学部
加納 寛

タイの古典文学を読まれたことがあるだろうか? 「タイ語が読めねえのに、そんなん読んだことある訳ないじゃん!」という声が聞こえてきそうだが、他国の古典文学を読むとき、その国の言語は必須条件だろうか? 皆さんは、シェイクスピアとか、英語で読んだのかな? 多くの人は日本語で読んだはず（私もです）。

タイには、詩聖ストーン・プー (สุนทรภู่



ストーン・プー像(後方)と彼の作品の登場人物プラアパイマニーの像

1786-1855) など、世界に誇ることができる文学者が多数存在している。もしタイがイギリスのように世界を席卷していたら（そんな状況には今後もならないと思うけど）、ストーン・プーはシェイクスピアが得ているような名誉を与えられ、誰もがその章句を唱えることができるような存在になっていただろう。

ストーン・プーは、18世紀後半に生まれ、19世紀に幾多の作品を残した人物である。下級役人として王宮に仕えたが、王宮の女性との恋愛沙汰で投獄されたり、結婚と離婚を繰り返したり、酒癖が悪かったりして、何度も投獄されたり追放されたりする波乱の人生を送った。よい子は決してマネしないように。

しかし、平民出身で平易な語彙や押韻を用いたストーン・プーは、庶民にも文学を広めるのに貢献し、大いに愛されている。作品としては、紀行詩などがあるほか、物語としては、『プラアパイマニー (พระเอกภัยมณี)』などがある。また、共作としては、『クンチャー・クンペン (ขุนช้างขุนแผน)』などがある。それまでの文学作品の主人公が王族などに限られていたのに対して、『クンチャー・クンペン』では、王族ではない人々が主人公となり、庶民が活き活きと描き出されていて、とても面白い。武術の達人でめっちゃイケメンでカッコいいけ



左は子供用の『クンチャーン・クンペーン』、
右は『プラロー』

ど浮気者で浮き沈みの激しい男クンペーンと、めっちゃ金持ちで一途だけどハゲでデブな男クンチャーン（この紹介の仕方だと性格がいい人に思えるかもしれないが、クンチャーンは決してよくはない。友達にはなりたくない）、そして2人の間で揺れ動く女性ワントーンの、3人の幼なじみたちの波乱万丈の生涯を描いている。あなただったら、どっちの男がいいですか？（私はどっちも嫌だ。）

タイ留学時代に論文を書くために読んでいた古典文学は『プラロー（ลิลิตพราโลง）』である。これは、ストーン・プーよりはるかに古い時代に、タイ北部の民話をもとに作られたとされる悲恋物語であり、タイの『ロミオとジュリエット』とも呼ばれている。留学時代、タイ前近代における精霊信仰の政治利用について調べていた私には、『プラロー』に活写された呪術師たちの活躍や精霊同士の戦いの様子が、とても魅力的に映ったものである。

主人公プラロー王（王といっても、盆地世界の小さな「クニ」の「王」なので、実質的には村長さんのようなもの）は、とてもイケメンで、その評判は近隣の国にも轟いていた。隣の敵国の2人の王女（モチロン絶世の美女である）が、その評判を聞いてプラローに恋い焦がれ、呪術師を使ってプラローを自国に呼び寄せようとする。プラローの国でも、敵国から呪術攻撃を受けていることが察知され、呪術師が敵の呪術を妨害するが、結局は精霊同士の戦いに負け（この精霊同士の戦いの描写が面白い。巻き込まれたら嫌だけど）、プラローは術にかかって敵国

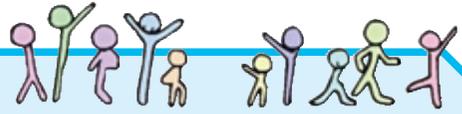
の王女に恋い焦がれ、妻を残して国を去ってしまう。険しい道を越えて敵国に到着したプラローは、王女たちとの甘い逢瀬を楽しむが、それを王女たちの父、すなわち敵国の王に知られ、急襲される。プラローと王女たちは刺客と戦い共に壮烈な死を遂げるという物語。儒教的道徳のなかで育ってきた我々としては、そもそも国や妻を捨てて恋愛のために敵国に行ってしまうという主人公の行動に首を90度ほどひねらざるを得ないが、そのあたりは1万3千歩くらい譲って読んでいただくと、プラローの苦悩に心震えるかもしれない。

タイ古典文学には、『ラーマキエン（รวมเกียรติ: ラーマヤナのタイ版）』や『ウェーサンドン（布施太子）本生（มหาเวสสันดรชาดก）』など、壁画や舞踊として楽しむことができる古典文学作品も数多い。これらは、目で見て楽しむこともできるので、まずは筋を知ることをおススメする。上述の『クンチャーン・クンペーン』を含めて多くの古典文学作品が読みやすく紹介されている、富田竹二郎編訳『タイ国古典文学名作選』（井村文化事業社、1981）がおススメ。愛大の豊橋図書館にあるので、探してみてください！

タイの古典文学は、韻文であることが多い。さらにタイ語は中国語と同様に声調がある言語である。したがって、タイの古典文学は、音がとても美しい。古典文学の音読CDは、タイ国内の学校教材のお店で「国語」の副教材として売られているので、聞いてみるとよいだろう。さらに、タイ文字が流暢に読めるようになったら、実際に読んでみると、耳と口が幸せになる。楽しんで！



王宮寺院のラーマキエン壁画

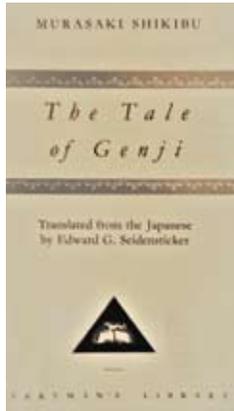


『源氏物語』の翻訳

—国際化の時代の日本古典文学—

文学部 和田 明美

『源氏物語』は今を遡ること約千年、紫式部によって書かれた長編の物語である。平安時代の日本文化や王朝貴族の恋に惹かれて、『源氏物語』をひもとく読者も少なくない。豊かで精緻な物語の叙述は、難解と言われながらも今日まで多くの読者を魅了してきた。



近年『源氏物語』に対する関心は国際的にも高くなっており、『源氏物語』の翻訳がそのブームに拍車をかけている。ケンブリッジ大学留学中の末松謙澄（1855～1920）が、はじめて1882（明治15）年に英語訳を手がけて以来、フランス語・ドイツ語・オランダ語・ロシア語・ポーランド語・フィンランド語・スペイン語・イタリア語・ハンガリー語・チェコ語・スロベニア語・セルビア語・ヘブライ語・ベトナム語・ミャンマー語・モンゴル語・中国語・韓国語等各国語への翻訳（完訳・重訳・抄訳）がなされ続けている。現代における再版・重版・新版や新訳版も含めて、海外出版が今日なお盛んに行われているのである¹。これに加えてビジュアルな『国宝源氏物語絵巻』等の源氏絵やメディアの領域にある漫画・アニメ・映画・舞台等の『源氏物語』の新たな試みが、国境を越え世代を跨いで多くの人々の関心を呼んでいる。

『源氏物語』の言葉の特色は、延べ語数約20万語・異なり語数約1万語からなる語彙の豊富さにある。殊に、紫式部によって新たに作り出された語は物語の独自性を支え、『源氏物語』以前に使用された語も、使用対象の拡大や場面の多様化により表現内容が豊かになっている。『源氏物語』の文章の随所に息づく作者紫式部の深

い洞察力や美意識の背後には、平安貴族社会の自然観や価値観があることは言うまでもない。作品は、四代の天皇の治世約70年余、藤原氏全盛期の摂関政治の下で生じた事件と史実に依拠しつつ、光源氏の一生とその行く末（次世代）を描いている。妻妾婚制度の軋轢に苦悩しながら嘆くより他なかった女性たちのありようや心理をリアルに表しているのである。「螢」の巻の「日本紀など（日本書紀等の正史）はただかたそばぞかし。これら（物語）にこそ道々しく詳しきことはあらめ」は、人間の存在を凝視した物語観のあらわれと見なされる。その一方で、『源氏物語』が千年前の古代信仰や自然観を含み持っていることも事実である。両者兼備のカオスの特性や平安貴族文化に基づく表現、やまと歌と中国（唐）の文化を余すところなく汲み尽くし受容・変容した作品こそが、世界に誇る古代的な文学遺産『源氏物語』の魅力といえるであろう。

では実際に、『源氏物語』はどのように翻訳されているのだろうか。英語・ドイツ語・中国語の翻訳をもとに、『源氏物語』の冒頭文と全795首の和歌の最初の歌（桐壺の巻）を比較してみたい。

◆いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなき^{きは}際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり²。
◇かぎりとして 別るる道の 悲しきに いかまほしきは 命なりけり³

① 【Arthur Waley “The Tale of Genji” (2002, 初版1925, 1965)】

◆ At the Court of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber one, who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest.

◇Though that desired at last be come ,because I go alone how gladly would I live!

② 【Edward G. Seidensticker “The Tale of Genji” (1992, 初版1959, 1976)】

◆In a certain reign there was a lady not of the first rank whom the emperor loved more than any of the others.

◇I leave you, to go the road we all must go. The road I would choose, if only I could, is the other.

③ 【Oscar Benl “Genji Monogatari Die Geschichte vom Prinzen Genji” (1992, 初版1966)】

◆Unter welchem Herrscher geschah es wohl? – da war unter den vielen Nyōgo unt Kōi eine, die zwar aus nicht allzu hohem Hause stammte, aber die kaiserliche Huld am meisten genoß.

◇Obgleich wir wissen, daß unser Leben begrenzt ist, Scheiden ist traurich-wie gerne schritte mit Euch Ich weiter den Weg des Lebens!



④ 【林文月《源氏物語》(1985, 初版1974)】

◆不知是那一朝帝王の時代, 在後宮衆多女御和更衣之中, 有一位身分並不十分高貴, 却格外得寵的人。

◇生有涯兮離別多, 誓言在耳妾心苦, 命不可恃兮將奈何!



⑤ 【豊子愷《源氏物語》(2006, 初版1980)】

◆話説従前某一朝天皇時代, 后宮妃嬪甚多, 其中有一更衣, 出身併不十分高貴, 却蒙皇上特別寵愛。

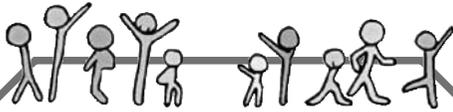
◇面臨大限非長別, 留戀殘生嘆命窮。

現在『源氏物語』は、38余の言語・100カ国を超える国々で出版・購読されており、国境を越え千年の時を経て、世界の人々に読み継がれている。国際化の時代における日本古典文学への関心は、『源氏物語』を頂点とする諸作品の翻訳を通して一層の高まりを見せている。そうであればこそ、翻訳によっては伝えきれない平安文化や平安時代の言葉の意味を精確に伝える日本側の努力も、ますます重要になるのである。

1 海外出版情報<http://genjiito.org>/2013年度基盤研究(A)『海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国翻訳に関する総合的研究』代表者:伊藤鉄也。井上英明「外国語訳」林田孝和・原岡文子編『源氏物語事典』大和書房2002。

2 山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈一』風間書房1999。「いづれの」から「時めき給ふ」までが主語句、「あり」が述語となる構文。「給ふ」が連体形であるために全体を統合(連体形による関係代名詞的統合機能)。これ以前の物語の冒頭文は、「今はむかし」(竹取物語など)「むかし〜ありけり」(伊勢物語・宇津保物語など)であるが、『源氏物語』は「作り物語り」とは異なる歴史的な実在性に基づく表現となっている。『源氏物語』には、亭子の院・宇多の帝・延喜の帝や在原業平・紀貫之・小野道風等が登場し、醍醐・朱雀・村上天皇時代の人物が描かれている。「いづれの御時にか」は、歴史的な実在性を意識した表現。【現代語訳】いづれの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんいらっしやっただけに、真に高貴な身分ではない方が、他の方々をしのいで帝の御寵愛をお受けになるということがあったのでした。

3 上三句は死を覚悟した桐壺更衣の諦観、下二句は生への絶ちがたい執着と嘆きを詠む。「生かまほし」は(生か・まほし)。「まく」は助動詞「む」のク語法で、「まほし」は「まく欲し」から転じた語。生きたいと切に願う心を表す。【現代語訳】今は限りとして、お別れしなければならぬ死出の道が悲しく思われますにつけても、生きたいと心から願う、それが命というものだったのですね。



古代ギリシア哲学の未来

文学部 伊集院利明

私は、それなりに長い間、西洋古代ギリシア哲学、とりわけ、ソクラテス・プラトン哲学の研究に携わってきたが、かなり前から、次第にそこから研究領域を移し始め、現在では、人生の意味 (meaning in life)、愛、幸福といった、人間にとっての諸価値についての哲学研究を自分の研究の主分野としている。ここに記すのは、そのような研究者としての現在の私の目から見て、これからの哲学界において古代ギリシア哲学と古代ギリシア哲学研究がどのように扱われていくであろうかの未来予測が、映るかという話となる。

おそらくは、それなりに長い将来にわたって、古代ギリシア哲学は、哲学界において一定程度に重要なものであり続けるであろう。ただし、古代ギリシア哲学研究がどれほどの重要性を持ち続けるかは、私自身にはなんとも予測がつかない。

哲学という学問において、哲学史研究は、例えば、歴史学における歴史学史研究、社会学における社会学史研究などとはちがう、独特な重要な位置づけを保持し続けている。哲学は、心理学や社会学や物理学などと同じように、現在進行形の学問であるのだが、にもかかわらず、哲学史上の(昔の)諸説は、最先端の哲学の新たな局面を切り開くための、参照点として、そして起爆剤として、現在でもかなり大きな役割を果たし続けている。

20世紀後半から現在の哲学の展開において、アリストテレス哲学の果たした役割にはかなり大きなものがあると言ってよい。近代倫理学諸説に対する対抗軸として、徳倫理学が、アリストテレス倫理学への参照を出発点として、提起されていったことにとどまらず、幸福、その他の諸価値についての諸観点の導入に果たした役

割、また、プロネーシスという柔軟な知性のあり方への注目など多くの点で、アリストテレス哲学は、様々な哲学諸説の開拓に大きな役割を果たした。そして、アリストテレス哲学の最も大きな影響は、おそらくは、その哲学的方法論であると言ってよいかもしれない。少なくとも、私の研究にかかわる価値論、(広い意味での)倫理学といった分野では、アリストテレス的な弁証論的方法を継承した反照的均衡などの方法論が、哲学的考察のほぼデフォルト設定とでもいうようなものになっていると言える。その意味でも、今日われわれはかなりの程度においてアリストテレス的な仕方でも哲学をすることが当たり前になっているとさえいえる。

古代ギリシア哲学が今後の哲学の発展、展開のための起爆剤、参照点としてどれほどの役割を果たしていくかについては、これまでの実績などからおおよそそのことを推し量る以上のことができない。しかし、昔の実績だけではなく、ここ10～20年ぐらいの実績から自然に考えるならば、古代ギリシア哲学がまだまだある程度の役割を果たすことは当然期待していいだろう。しかし、問題が二つある。

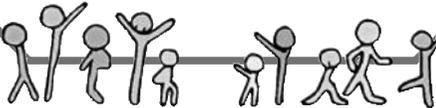
まず、古代ギリシア哲学が起爆剤、参照点としての役割を果たし得るようなものであっても、古代ギリシア哲学(史)研究がどれほどの役割を果たし得るかは不明確なところがある。それほど詳細で緻密な読み込みのない、ごく一般の哲学者にとっても、古代ギリシア哲学はそれなりに魅力のある発想の源でしばらくはあり続けるであろう。一方で、20世紀後半にアリストテレス哲学が与えた刺激を振り返ってみるならば、それが当時のアリストテレス哲学についての緻密な文献研究との連動抜きにはあり得なかったことが思い起こされてくる。例えば、G. Owenをはじめとした当時の活発な研究抜きには、とりわけ、アリストテレス的方法論への哲学界の着目は不可能であったであろう。もちろん、これまでの実績から考えて、そのような緻密な哲学史研究が最先端の哲学諸説を賦活化させる可能性は考えられる。しかし、問題はいわばコストパフォーマンスであり、どこまで哲学史研究の労力に見合ったものが得られるかの見

込みについての実感のありようによっては、研究は衰退していく可能性もある。

もう一つが、ソクラテス・プラトン哲学についてである。ヘレニズム期より後の西洋哲学史において、プラトン（的）哲学が優位であった時期とアリストテレス哲学が尊重された時期がある。前者としては、教父哲学の時代、ルネサンス期が、後者としてはスコラ哲学の時代、そして20世紀（特に後半）以降現在に至るまでが挙げられる。プラトン優位時代はまた訪れ得るのであるのか。プラトンの著作はギリシア哲学についての哲学的知識がなくともとりあえずは楽しめるようなものである。しかし、それでも、ギリシア哲学史研究の基盤を欠いたところでは、それは十分には機能を果たし得ないかもしれない。一見「割に合わない」ようではあっても、一定数の学者がギリシア哲学史研究を続けることは必要なかもしれない。

古典を撫でる『アクタ・ サンクトールム(聖人伝)』

文学部 小野 賢一



この春、手術・入院を経験し、海外渡航ができない健康状態になってしまった。そこであらためて海外渡航をせずに、いかに愛知大学で生活を充実させることができるかを考えてみた。手始めに自分の学問について、振り返ってみることにした。

私の専門は西欧中世史である。中世史家が用いる史料は、主に5世紀から16世紀頃に書き記された古文書である。ヨーロッパの古文書館では生の史料をみることができる。現物が残っていることもあるし、写しだけが残っていることもある。千年も前に書き記されたものとは思われないほど鮮明な史料に出くわすときもある。そのような幸福に巡り合ったときには、西欧中世史を専攻してよかったとしみじみ思う。これら西欧中世の史料の多くは、ラテン語で書かれ

ている。ラテン語は古代ローマ帝国で使われていた言語であったが、ローマ・カトリック教会が教会で用いる言語としてラテン語を採用したこともあり、中世を通じて学術・行政・法律などの文書はラテン語で書き記されることとなった。

西欧中世の社会は、「戦う人」である貴族と「祈る人」である聖職者と「耕す人」である農民の三身分が明確に分かれた社会であった。これは、インド・ヨーロッパ語族に共通して見受けられる特徴である。貴族と農民は、古い時代のドイツ語やフランス語などの俗語を使って生活し、ラテン語を使いこなすことはできなかった。そのため、唯一ラテン語を使いこなすことのできた聖職者が、学術・行政・法律などの文書を扱った。西欧中世の社会では、聖職者が知識を扱う階級であった。中世の日本と異なり、役割分担がはっきりしていたのである。中世のヨーロッパに成立した大学には、ヨーロッパ各地から教師や学生が集まった。当時の大学の教師や学生の身分は聖職者であり、共通語はラテン語であった。この共通語としてのラテン語のおかげで、中世のヨーロッパの大学は国際的な空間であった。

中世の大学生は熱心に勉学に励んだが、遊び人の学生もいた。またアルバイトに励む学生もいた。たとえば葬式で泣く「泣き坊主」のアルバイトなどがあった。学生寮もあった。パリ大学は通称ソルボンヌ大学といわれることもあるが、ソルボンヌとは学生寮をつくった聖職者の名前である。ヨーロッパ最大の学生街は、パリのカルチュ・ラタンと呼ばれる地区であるが、これは「ラテン語の地区」という意味であり、中世のパリ大学においてラテン語で授業が行われていたことの名残である。中世の大学では、あたかも教師たちはトサカを逆立てて争う鬮鶏の鶏のように論争していた。こうした学生と教師の日常の風景は、今の愛知大学にも受け継がれているように思われる。

中世の大学は教師と学生が組合をつくることによって成立した。この組合のことを「大学 *universitas*」といった。つまり大学とは、もとは教師と学生の組合であった。大学が、他の教育・研究機関と比べて、外部の権力からの自立



性がきわめて強いのは、学問を行う組合として大学がはじまったことに由来する。愛知大学は、勉強したい教師と学生が第二次世界大戦後、豊橋に集まってできた大学である。つまり愛知大学も、もとは教師と学生の組合であった。その成り立ちゆえに、中世のヨーロッパの大学の自立の精神と同様の精神が、今も愛知大学では生きているように思われる。

愛知大学の先学たちがたくさん本を集めることができたのも、おそらくこの成り立ちによる。その恩恵を被って、生の史料ではなく、刊本ではあるが、中世のヨーロッパで書き記された文書を、私たちは愛知大学で読むことができる。

今私が夢中になって読んでいる文献は、『アクタ・サンクトールム』Acta sanctorumである。それは、17世紀にボランドゥスという名のイエズス会士を中心に集まった人々の共同研究によって編纂された聖人たちの事績録であり、膨大な数の聖人伝や奇蹟録が含まれている。本文だけでなく、学術的に価値の高い註解もラテン語で書かれている。『アクタ・サンクトールム』は、千年以上ものヨーロッパの知の蓄積と幾世代にもわたる碩学たちの献身的な努力によって生み出された。愛知大学に赴任して、この文献が、豊橋図書館の書庫の本棚一面に陳列されているのを見たときは、驚かされたものである。一般の図書館などで見ることができる文献ではないので、在学中に書庫に入り、『アクタ・サンクトールム』の威容を見て、ヨーロッパの文化の重層的な蓄積を感じとって欲しい。



1. 今、古典ブーム到来！

それにしても、今回のLinguaのテーマは、なんと今の世の中の流れに一致しているのだろう。

常々、とっつきにくそうなものに興味を持ってもらうには、どうすればよいかと頭を悩ませている私は、この数年、NHK番組『100分de名著（注1）』の特に古典作品を扱う回で感心することが多い。なぜなら、古典作品は、現在社会に通じるもの、現在の私たちが共感できるものを含んでいる、だから古典作品は、時代を経て、書かれた地域を超えて、生き残っているのだということ、番組は上手く紹介しているからだ。

そして、2017年の出版界では、羽賀翔一による『漫画 君たちはどう生きるか』が話題となり、吉野源三郎の原作本（1937年）も書店売り上げの上位を占めるということが続き、2018年春のテレビ界では、『モンテ・クリスト伯』（デュマ作、1844-46）の放映が始まっているのだ。

日本の制作会社がドラマ化する本を探していき着いたのが19世紀フランスの小説家デュマの作品ということならば、きっと他にも面白い古典作品はある！もう、これは、古典作品を読まないに損だという気になってくるのではないか。

さて、ロシア古典作品として、今回のLinguaではトルストイの『戦争と平和』（1865-69）を取り上げる。

『戦争と平和』は大変長い作品で、名前が出てくる登場人物は全部で500人以上もおり、読み始めても、その長ささと登場人物の人間関係の複雑さで挫折してしまう作品であるが、いろいろな読み方ができる作品である。

2. 悩める若者よ、読むべし！

『戦争と平和』は2016年にBBC放送でもドラマ化されている（全8回）。昨年、BS放送で放

送されたばかりなので、これを見た人も多いのではないかと思う。

ドラマ化や映画化する場合には、全ての登場人物が出てくることはない（多すぎて、それは不可能！）。必ず『戦争と平和』の主たる登場人物たちの恋愛エピソードに絞られて脚本は作られている。

恋愛小説としての『戦争と平和』の主軸は3人の若者の物語にある。

恋に傷つきながら真の愛を理解する女性となる少女（ナターシャ・ロストフ）の成長物語であり、どう生きていくべきか悩みながら生きる者（ピエール・ベズーホフ伯爵、作者トルストイ自らがモデルであると言われている）と、自分が正しいと思うことと社会との折り合いをどうつけるべきかに悩む者（アンドレイ・ボルコンスキー公爵）の人生の物語である。

人生の意味を問い続けて迷う姿と、自分だけの正しさを持ち、それを堅持しようとする潔癖さは、いつの時代でも見られる若者像であり、『戦争と平和』は、若者が大人になる際に遭遇する苦悩は同じであると教えてくれる。

3. 歴史好きは読むべし！

しかし、映画やドラマではなくて、小説『戦争と平和』を読めば、この作品は、ナポレオン戦争時代を描いた歴史小説であることがわかる。

したがって、『戦争と平和』には、ナポレオンと闘いながら、ロシア人は何を考えていたのか？といったことが描かれているのだ。

例えば、ナポレオンのことをたまたま成功した成り上がり者だと侮る人たちも描かれているが、これとは逆に、ピエール・ベズーホフ伯爵やアンドレイ・ボルコンスキー公爵のように、ナポレオンは社会の矛盾を解消するために現れ、また解消する能力があるから支持されている、偉大な人物だという見方をする人たちも描かれている。そして、後者の見方をする人たちは、ナポレオンに対して、ロシアに攻めてくる敵でありながらも、この世の中が変わるきっかけとなるのではないかと期待し、そして自らもナポレオンのように英雄となることを夢想するのである。

『戦争と平和』を読めば、ナポレオン戦争時代のロシア社会が、この時すでに内包していた矛盾と混乱のせいで、ロシアは、最終的に1917年の革命に至ったのだということに納得できるのだ。

そして、2018年現在、世界は、シリア問題やイラク核合意履行問題などで、大国同士がお互いに避難し合い、ある国が他国への空爆を行っている。戦場から遠くにいる日本人が今読むべき作品であると思う。戦争は、戦場で戦う者はもちろん、戦場に行かない者の日々をも破壊する。特に、従軍している兄たちに憧れ、兄たちを追って前線に出て、最初の戦いで頭を打ちぬかれて死ぬ少年ペーチャは哀れであり、戦争の残酷さと無意味さを感じないではいられない。

『戦争と平和』は、今まで5人の翻訳者によって翻訳されているが、歴史小説として『戦争と平和』を読むとすれば、トルストイ研究者である藤沼貴氏の『戦争と平和 全6巻』（岩波文庫）が秀逸である。本棚で、6巻が揃って並んでいるのを見ただけで手を引込めたくなるが、ナポレオン戦争時代のロシア社会を理解しながら読み進められるように、当時のロシア社会事情や文化、ロシア史についてのコラムが全部で38テーマ挿入されており、その解説は大変充実している。

4. 見覚えのある人たち

最後に、500人を超える登場人物がいる『戦争と平和』は、まるで人間図鑑とも呼べる。滅私の心、公正さを保とうとする者、そしてその反対に、他人を押しつけてでも自分の利益や優位を確保しようと画策する者、世の中に絶望しあきらめている者、、今の社会を思い返してみると、自分が出会った人、最近、新聞やテレビで取り上げられる人の顔が浮かぶはずである。

『戦争と平和』はいろいろな読み方ができる作品なのだ。さあ、『戦争と平和』を読もうではないか！

（注1）手に取ることをためらったり、一度手を出して挫折した古今東西の名者を紹介することを目指した番組。

学習体験記

ある先生の言葉

国際コミュニケーション学部3年
迫田 篤志

私は以前、実用英語技能検定の準1級の筆記試験に合格して、あとは面接試験をパスすれば正式にこの検定の実績を履歴書に書けるところです。今回は英検準1級の筆記試験を受ける際に、ある先生の言葉が私を奮い立たせてくれたことの話します。

英検は私の学科の学生ではほとんどの人が2級までを受かっているように思われます。しかし、同じ学科の友人に「準1級は受けないの?」と疑問を投げかけると、皆が口を揃えて「単語がヤバイから受けない」と言います。たしかに、初めて私が英検準1級パス単を手にした時、2級との差に驚いて単語帳をそっと閉じたことがあります。最初は私もこんなもの無理と決めつけていました。

しかし、ある授業を担当していた愛大出身の非常勤講師A先生が授業中にこんなことを言いました。「私学文系四大、なにもしないとダメになるよ」と。彼女の話は愛大生という身分を経験しているからか、どこか強い意志を感じた上に、やはり説得力がありました。たしかに私は法学や経済、経営の知識は無い上に、これと言ってできるものもありませんでした。さらに、私たち英語学科の学生は就活において、帰国子女や、長期留学経験者の、もうそれは、私の英語力とは桁違いの発音の良さ、英語表現力、会話能力をかけ備えた人たちと闘わなければならないという宿命があります。となると、A先生がおっしゃった通り、何もしないとダメになるというのは確かです。私は彼女の言葉に鼓舞されて、とりあえず手始めに準1級に受かってやるという強い意志を持って勉強を開始しました。単語帳は本当に初見の単語が多かったのですが、浪人を経験している雑草魂からくる根性で、

単語帳の音声をひたすら聴き、単語を聞いただけで意味が一瞬で出てくるくらいまで、私はその単語帳を使い、一次をパスできました。現在は面接試験の対策をしているところです。

中国語を学んで

経済学部2年 垣野 紗輝

私は履修選択をする際にどの言語にするかを悩んでいました。そんな中で、中国語は漢字を使うため日本人が親しみやすいということと愛知大学は中国に関する教学が盛んということを知り、中国語を選択することにしました。

ここでは私がこの1年間実践してきた中国語の勉強法と感想を述べたいと思います。最初に勉強法について紹介します。予習は教科書の本文をノートに書き写すという作業をします。その際に私は漢字を間違えないように書くことと意味を必ず辞書で調べるということをしていました。なぜなら、中国語は日本語と同じで漢字を使いますが、中国語は簡体字なので日本の漢字と少し形が違うものがあるからです。また意味が同じ漢字でも日本と中国では意味が違い、全く反対の意味を持つものがあるので思い込みで覚えてしまわないようにするためです。次に復習の仕方は先生に教わったように教科書の本文をCDに合わせ、声に出して10回読み、中国語を一回書くという作業を3度繰り返すという方法で勉強をしていました。しかし私の場合、声調を正確に発音する事が難しかったので、CDの音声を携帯に入れて通学の電車や空き時間などを利用し繰り返し聴いたり家でもCDを聴きながら声に出したりして声調を掴むようにしていました。

最後に中国語を履修した感想を述べます。履修して間もない頃は勉強についていけないのが不安でしたが、先生に教えていただいた勉強法と自分なりの勉強法を合わせて取り組むことのできる間にか不安は消え、楽しさになっていきました。さらに努力が認められ中国語スピーチコンテストにも出場させていただく事ができました。賞には手が届きませんでした。人前で中

国語でスピーチをすることは滅多にない機会だと思うので良い経験になったと思います。そして最近では中国人の方が会話をしている際に部分的にですが、内容を理解する事ができるようになり、中国語を履修してよかったと思っています。

フランス留学を体験して

文学部4年 今牧 千晶

私は1年間フランスに留学し、ストラスブールの語学学校へ通いました。ストラスブールはフランス北東に位置するコウノトリやクリスマスマーケットで有名な都市です。本当に綺麗なので調べてみてください。また、美しいことは勿論フランス留学は他の国への留学に比べてとても安いです。

留学で1番困ったことは住居問題です。渡仏までに住む家が決まらずルームシェアの面接の予約を取りフランスに着いた2日目に家を周りました。しかし、言葉は分らないし治安も悪そうなので、犬達にいっぱい出迎えられ泣きそうになっていました。そして1番最後に訪れた家でくらしましたが自分の語学力が上がり学校でもクラスメイトに圧倒され発言ができませんでした。大家さん一家の上の階に暮らしていましたが他の同居人との日常会話が英語だったのでフランス語が上達せず3ヶ月で引っ越しをしました。次の家では老夫婦と30代のカメラマンの3人のフランス人と一緒に暮らしました。ご飯の時間が重なると一緒に食べ、一緒にパレードやパリに行ったりして日常でもフランス語を使うことからフランス語への恐怖心がなくなりました。自信をつけてからタンデム学習相手を探して日本語とフランス語の会話練習をしました。その交流関係から学生の集まりにも行くようになったのですが、タバコや酒にクラブを勧められて困った覚えがあります。私は体に悪いから、時間の無駄だからと言いましたが、本当にそれをやってみてそう思ったのかと返され何も言えなかった思い出が強く思っています。また同居人にも嫌なことがあるなら曖昧にしない

でちゃんと断りなさい、周りを気にしすぎだと注意されました。これらの経験は本当に今でも私に影響を与えています。皆さんにも是非自分について留学で考えてみてください。

フランスセミナー報告書

文学部3年 宮脇 巧

愛知大学では春休み・夏休みを利用した短期語学留学が毎年開催されていますが、今回僕はこの春休みを利用してフランスに1ヶ月間ホームステイをして滞在しながら、オルレアン大学で集中的にフランス語を勉強してきました。僕にとって初めての海外で、セミナー開始してすぐはホストファミリーとうまく会話ができずにあちらの予定が分からなかったり、環境が変わったことで体調が優れなかったりと色々辛かったのですが、困り事があれば、引率の先生やこのセミナーを通して知り合った友達たちに相談したりして、引率の先生が帰国してからは自分たちで解決できるようになりました。このセミナーでは愛大生だけのクラスが特別に設けられ、フランス人の先生方が授業をしてくれます。どの先生も外国人の僕たち相手でもとても熱心に授業してくださり、充実した学校生活を送れました。僕たちにとっては学校でも日常生活でも見るもの一つ一つが新鮮なことばかりでした。

一ヶ月僕たちが学び、生活を送ったオルレアンはとても住みやすい街でした。オルレアンはパリから電車で南に一時間の場所に位置していますが、市内は本当に美しく、落ち着いた街という印象でした。フランスは日本より治安が悪いと聞いていたのでかなり神経を尖らせていたのですが、徐々に慣れて土地勘がついて自分たちだけでの行動が当たり前になりました。週末には、各々でパリやストラスブールに行きました。これはプログラムにもともと組み込まれていたものではなく、自分たちで予定を組んで切符を買って旅行を楽しんできました。その次の最後の週には大雪のため延期されていたモン・サン・ミッシェル、サン・マロ散策も天候に恵

まれて素晴らしいものとなりました。このフランスセミナーを通して自分のフランス語の実力を知るとともに、そしてそれをどう伸ばしていくかというすべを見いだせた気がします。そしてこれからもフランス語を学び続けるモチベーション上昇にもつながったので、このセミナーに参加して本当に良かったと思いました。



異文化にふれて

文学部3年 菊山 紋加

大学での専攻が英語、という理由だけで決めた1ヶ月間のカナダ留学。

時差16時間という遠い地。言語も違えば文化も違う。そんなカナダで経験したことを書きたいと思います。

みなさんのカナダのイメージはなんでしょう。わたしはメープルシロップとサーモンくらいしか思い浮かびませんでした。カナダへ行ってみてわかったのはその自然の豊かさと、その自然と街の融合です。わたしの通った語学学校

は都市部のバンクーバーに位置していました。東京に匹敵するくらいの街でしたが、少し歩けば、海がみえ、自転車に乗れば世界の公園一位に選ばれたスターレーパークへ行くことができる。写真は学校からすぐの景色です。



そんなカナダには多くの人種の人々が暮らしています。日本では海外から来た人は肌の色の違いや、顔立ち、言語などによって目立ってしまいます。しかし、多くの人種が混同するカナダでは人種の壁はありませんでした。私のクラスには様々な国の人がいたのでクラスメイト達と母国について話したり、その国の伝統的な食べ物を食べたりしました。みんな自分の国のことを教えてくれたので、毎日楽しくランチタイムを過ごせました。

英語のほうですが、私のホームステイ先には多くのルームメイトがいたため、英語で話す機会が多かったです。ルームメイトたちと夕食後におしゃべりをするのが日課でした。ネイティブの方は英語を話すのが早いため、最初は戸惑いでしたが、生活しているうちに段々聞き取れるようになりました。語学学校では発音や、英



語のニュアンスの違いについて学び、習ったことを使って、ディスカッションしたりしました。誰と話すにも英語をつかうため、一か月だけでも英語は上達すると思います。

最後になりますが、私にとってこの留学はとてもいい経験となりました。英語の生活にどっぷりとつかり、様々な国の人々との交流によって今までよりも成長できました。



ことばの旅

—「自由」という語について—

経済学部 葛谷 登

明治以降、近代日本の日常生活の中で「自由」という語がよく出て来ます。しかしこの語が実際どのような意味であるのか、実によく分からないのです。この語の意味を考えようとするとまるで素手でウナギを捕まえるような焦燥感に陥ります。

三省堂の『新明解国語辞典』の第五版の「自由」の項には、「他から制限や束縛を受けず、自分の意志・感情に従って行動する（出来る）こと。また、その様子。〔民主主義社会では、社会秩序を乱さぬ限り、その人の主体的な意志・判断に基づく言動の認められる権利を指す。…〕」（628頁）とあります。

「世界の危機の根源を西洋的な合理主義にもとめ、それを克服するものは、東洋的叡智を除いて外にはないという文明論にもとづいて、コスモポリタンの活動を展開した。」とされる鈴木大拙（1870-1966）（三省堂『コンサイス日本人名事典』第5版、722頁）は、『東洋的な見方』という本の「自由・空・只今」という文章の中で「自由」についてつぎのように述べています。

元来自由といふ文字は東洋思想の特産物で西洋的な考へ方にはないのである。…それを西洋思想の潮のごとく輸入せられたとき、フリーダム (freedom) やリバティ (liberty) に対する訳語が見つからないの

で、そのころの学者たちは、いろいろと古典をさがした末、仏教の訳語である自由を持って来て、それにあてはめた。…西洋のリバティやフリーダムには、自由の義はなくて、消極性をもつた束縛または牽制から解放せられるの義だけである。それは否定性をもつてあて、東洋的自由の義と大いに相違する。

（岩波『鈴木大拙全集〔増補新版〕』第二十巻、230頁）

つまり、明治以降フリーダムやリバティの訳語として「自由」という語が用いられようになったというわけです。

米国の宣教師ヘボン（James Curtis Hepburn、1815-1911）は「'67（慶応3）日本最初の和英辞典『和英語林集成』を刊行」（三省堂『コンサイス世界人名事典』第3版、887頁）している。1886年（明治19年）に出た『改正増補和英語林集成』（第3版、復刻版、講談社）の‘FREEDOM’の項は「Jiyū」（842頁）、すなわち「自由」、また‘LIBERTY’の項は「Jiyū, jizai, jishu」（868頁）、すなわち「自由、自在、自主」となっています。

また同辞典の‘JIYŪ’の項は「Freedom: liberty; free, at one's own pleasure; without constraint; voluntarily; convenient:」（228頁）となっています。

C.O.D.の第六版では‘freedom’の項は“Personal

liberty, non-slavery...; civil liberty, independence,...; liberty of action, right to do,” (421頁)、また ‘liberty’ の項は “Being free from captivity, imprisonment, slavery, or despotic control; personification of this” (624頁) となっています。

これらはおおむね鈴木大拙の述べるところと同じではないでしょうか。

それでは「自由」という語は元来どういう意味なのでしょう。鈴木大拙は語ります。

自由はその字のごとく、「自」が主になっている。抑圧も牽制もなにもない、「自ら」または「自ら」出てくるので、他から手の施しやうのないとの義である。自由には元来政治的意義は少しもない。天地自然の原理そのものが、他から何の指図もなく、制裁もなく、自ら出るまでの働き、これを自由といふのである。

(前掲『鈴木大拙全集(増補新版)』第二十卷、230頁)

つまり、西洋の ‘freedom’ や ‘liberty’ は束縛や拘束から解放されるという消極的な意味を有し、他方東洋の「自由」とは自分が主体になって行為するという積極的な意味を有するというのではないのでしょうか。このような捉え方は大略双方の語の本質を言い当てているように思われます。

『新明解』の「自由」の語義のうち前半の「他から制限や束縛を受けず」は西洋の ‘freedom’ や ‘liberty’ の意を、他方後半の「自分の意志・感情に従って行動する(出来る)」は東洋の「自由」の意を体しているのではないのでしょうか。

つまり、現在用いられている「自由」の語義には明治以前の本来の「自由」の意味に加えて明治以降、西洋の ‘freedom’ や ‘liberty’ の意味が新たに加わったということになります。

実際、新約聖書の有名な「ヨハネによる福音書」8章32節の「真理はあなたたちを自由にする。」“the truth will set you free.” (和訳対照新共同訳) という文の中の「自由にする」(‘set free’) という句は罪の束縛から解放するという意味で用いられているのではないのでしょうか。

この箇所はヴァルガタ訳では、“veritas liberabit vos.” となっています(ギリシア語訳では、“ἡ

ἀλήθεια ἐλευθερώσει ὑμᾶς.”)。この文は三人称単数未来時制で、「自由にする」にあたるラテン語の動詞は ‘libero’ です(ギリシア語の動詞は ‘ἐλευθερω-ώ’)。C.T.Lewis の『初級ラテン語辞典』(Elementary Latin Dictionary) (Oxford) では、語義が ‘set free, free’ (470頁) となっています(故望月光神父様旧蔵のオックスフォードの第9版『希英辞典』[Greek-English Lexicon] でも語義が ‘set free’ [p.532] となっています)。羅希の古典語は「解放する」という意味であるように思います。

古屋安雄『キリスト教と日本人「異質なものと」の出会い』(教文館)の「羽仁五郎と『われら』』という文章には、「国立国会図書館のはいったところに、ギリシア語で『真理はなんじらを自由にする』、そして日本語で『真理がわれらを自由にする』と刻まれている。…言うまでもなく、この言葉は聖書のヨハネ福音書八・三二に記されているイエスの言葉から来たものである。ギリシア語はそのままであるが、日本語は『なんじらを』というのを『われらを』に変えたものである。」(20頁)とあります。国会図書館に掲げられた言葉は、真理は無知の束縛から解放するというほどの意味でしょうか。天動説を信じてやまない人々の真っ只中で勇気をもって地動説を主張したガリレオの姿が彷彿と思ひ浮かびます。

中村元他編『岩波仏教辞典』の「自由」の項には、「また解脱のことを svatantrīkaraṇa と解釈していることがあるが、これこそ〈自由〉(みずからに由る)と訳し得る語である。…〈自由〉もしくは〈自由自在〉の語が、煩惱の束縛から離れた解脱の境地を説明する語として盛んに用いられるようになるのは、唐宋の禅学文献からである。」(389-390頁)とあります。

ここで極めて興味深いのは自らが主体となることを示し、「自由」と訳し得るサンスクリットの svatantrīkaraṇa という語が、束縛から解放されるという意味の漢語「解脱」に解釈される例があることであり、唐や宋以降の禅仏教において「自由」という語に「解脱」の意味が付与されるようになったことです。それはすなわち人間の理想的な内的世界の消息は根源的、本質的に同一であるということを語っているように

見えます。つまり、禅仏教に見られる漢語の「自由」という語は東縛からの解放の意味を表わす西洋の‘freedom’や‘liberty’と同じ意味の様相を有するようになったのです。

小学館の『日本国語大辞典 第二版』第6巻の「自由」の項には、『こんてんむつむん地』の中の文句が用例として挙げられています(1197頁)。小学館の用例は探し当て得ませんでした。『コンテンツスムンヂ』とは～尾原悟編『コンテンツムツスムンヂ』(キリシタン文学双書)(教文館)の解題によれば～「一般にラテン語の『イミタティオ・クリスティ』(きりすとにならいて)の名で呼ばれている一五世紀に表わされた信心書の日本語訳ローマ字本である。」(273頁)というものであり、その巻第三の第五には、「如何に諸善諸徳の源ご哀憐を以て諸悪の執心と、妄りなる大切を通し給へ、然らば大きな心の自由解脱を以て御前に罷りゐ奉るべし。」(同書、86頁)とあります。

トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』(池谷敏雄訳)(新教出版社)の中の対応すると思われる箇所第3篇第4章では、「あらゆる悪い情愛とみだりな愛からわたしを自由にして下さい。そうすればわたしは心が大いに自由となってあなたと共に歩むでしょう。」(109頁)となっています。ヴァテイカンから出ている *De Imitatione Christi* (Edizione critica a cura de Tiburzio Lupo, S.D.B., 1982) では該当箇所は、「Ipsa me liberet ab omni affectione mala et inordinata, et ambulabo tecum in magna cordis liberatae。」(141頁)となっています。

‘cordis libertas’ とは現代では「心の自由」と訳し得るものでしょう。『コンテンツスムンヂ』では「心の自由解脱」となっているものです。ここに「自由解脱」とあるように、「自由」と「解脱」が並列されているのは、同一の状態を正反対の異なる視点から述べずにはいられない衝迫の思いによるものではないでしょうか。

2017年7月29日(土)に総合テーマを「中国版ドチリナをめぐる」とする関西大学東西学術研究所第10回研究例会に参加したとき、奥村佳代子先生が「中国版ドチリナキリシタンをめぐる」という題でお話になりました。岩波書店から出ています亀井孝・H・チースリク・

小島幸枝著『日本版イエズス会版キリシタン要理』の中の「中国をはじめ東洋諸国において問答式の教書は数多くあるが、これらのばあいはまた、いずれも、師が弟子の質問に答える形式になっている。こうしてドチリナの形式は、やはり“東洋化”の結果とみなすべきである。」(33-34頁)という箇所を取り上げられたように記憶します。東洋思想史の学徒ならば、これは禅の語録の形式を摸したものではないかと思うことでしょう。

豊橋図書館には筑摩書房の『禅の語録』の翻訳シリーズが入っています。その後、ときおりこの『禅の語録』に大まかに目を走らせています。師が弟子に問う形式もありますが、弟子が師に問う形式が目立ちます。

前掲『キリシタン要理』は「日本のばあい翻訳や編纂に協力した日本人修道士の努力こそ認められるべきであろう。」(33頁)と述べています。或いは日本人修道士のなかに禅の道を歩き悟りの完成を目指してカトリックの門に入った人たちがいたのでしょうか。

幕末、明治期に西洋から伝来した‘freedom’や‘liberty’などの西洋思想の根幹を表わす言葉は仏教、とりわけ梵漢両語に通じた知識人が「自由」と訳すに功のあったように思われてなりません。

[付記] 2017年7月29日(土)に関西大学で東西学術研究所第10回研究例会～総合テーマは「中国語版ドチリナをめぐる」～がありました。わたくしは『『天主聖像略説』についての覚書』という題で取り留めのない苦し紛れの話をしていただきました。拙文はそのとき思い巡らしたものを止まり木のようにして列ねたものです。貴重な経験をご恵与くださいました関西大学の内田慶市先生には甚深なる謝意を表するものです。

2017年度（第23回） 外国語コンテスト結果報告

去る2017年11月に名古屋校舎恒例の外国語コンテストが開催されました。第23回を迎えたコンテストも多く、多くの学生たちが参加し、朗読、暗誦、自由作文スピーチ、歌唱など、多様な種目でそれぞれの力を発揮してくれました。結果は以下の通りです。

2018年度第24回も秋学期に開催予定ですので、ふるってご参加ください！

英語

開催日時：2017年11月16日（木）13：30～

参加者総数：7名

課題：自作プレゼンテーション

入賞者：

- | | | |
|----|--------------------------------|----------|
| 1位 | 法学部4年 | 高林 滉平 |
| | タイトル『We should not rely on AI』 | |
| 2位 | 経営学部3年 | XU ZIHAO |
| 3位 | 法学部3年 | 篠木 瑛斗 |

ドイツ語

開催日時：2017年11月27日（月）18：10～

参加者総数：12名

課題：朗読

入賞者：

- | | | |
|----|-----------------|-------|
| 1位 | 現代中国学部1年 | 三宅 夏央 |
| 2位 | 国際コミュニケーション学部2年 | 内田 亜月 |
| 3位 | 国際コミュニケーション学部2年 | 松岡 佑太 |

フランス語

開催日時：2017年11月16日（木）12：30～

参加者総数：89名

課題：歌唱

入賞者：

- | | | |
|----|-----------------|-------|
| 1位 | 国際コミュニケーション学部2年 | 葉柴優理恵 |
|----|-----------------|-------|

- | | | |
|----|-----------------|-------|
| 2位 | 国際コミュニケーション学部1年 | 安藤 海渡 |
| | | 中島 瑞月 |
| | | 林 理紗子 |
| | | 牧 睦 |
| 3位 | 経営学部2年 | 芝田 有輝 |

中国語

- ①対象学部：法学部・経営学部・経済学部・
国際コミュニケーション学部生

開催日時：2017年11月16日（木）12：30～

参加者総数：14名

課題：朗読

入賞者：

- | | | |
|----|--------|-------|
| 1位 | 法学部3年 | 後藤 健斗 |
| 2位 | 法学部1年 | 大内 穂佳 |
| 3位 | 経済学部1年 | 内村 友香 |

- ②対象学部：現代中国学部生

開催日時：2017年11月30日（木）15：30～

参加者総数：15名

課題：暗唱／自由

入賞者：

（課題部門）

- | | | |
|----|----------|-------|
| 1位 | 現代中国学部1年 | 大野 月香 |
| 2位 | 現代中国学部1年 | 高浪菜津希 |
| 3位 | 現代中国学部1年 | 村田 舞雪 |

(自由作文部門)

- 1位 現代中国学部2年 鄭 瑩
 タイトル『拉麺』
 2位 現代中国学部2年 長坂 泉
 3位 現代中国学部2年 林 優菜

ロシア語

開催日時：2017年11月21日(火) 16:30～

参加者総数：23名

課題：朗読／歌唱

入賞者：

- 1位 法学部1年 浅野 楓
 水越ことみ
 吉田 朋世
 2位 法学部1年 早川颯史郎
 経済学部1年 森本 開
 3位 法学部1年 河村 響

韓国語

開催日時：2017年11月13日(月) 16:30～

参加者総数：4名

課題：自由作文

入賞者：

- 1位 国際コミュニケーション学部4年 山田 典枝

2位 国際コミュニケーション学部2年 前川のどか

3位 国際コミュニケーション学部4年 日比野由佳

タイ語

開催日時：2017年11月14日(火) 16:30～

参加者総数：35名

課題：朗読／歌唱

入賞者：

- 1位 国際コミュニケーション学部1年 木下 智葉
 2位 国際コミュニケーション学部1年 河合 優奈
 3位 経済学部1年 宮田 真那

日本語

開催日時：2017年11月21日(火) 12:30～

参加者総数：8名

課題：自作スピーチ

入賞者：

- 1位 国際コミュニケーション学部 SHWE SIN SOE
 タイトル『おかしい日本語』
 2位 協定留学生 胡 元慶
 3位 国際コミュニケーション学部1年
 NAUFAL ARVIEN SUDRAJAT



豊橋ランゲージセンターに行ってみよう!

1. 豊橋校舎 ランゲージセンター

ランゲージセンターは豊橋校舎3号館1階にあり、外国語の書籍や映像資料をたくさん揃えています。

大学で初めて学ぶ外国語の勉強、すでに学んでいる外国語のレベルアップ、外国語検定試験の対策など、様々な目的に合わせた外国語関係の資料を約1万1,000点所蔵しています。

各外国語資料の所蔵点数はこちらです。

言語	所蔵数	言語	所蔵数
英語	3,101	日本語(留学生用)	1,089
中国語	1,607	ポルトガル語	69
フランス語	1,057	その他の言語	1,414
ドイツ語	1,053	NHK語学講座	15
ロシア語	1,013	外国語雑誌	5
韓国・朝鮮語	600	英字新聞	2

資料の中には、各外国語の専任教員やスタッフおすすめの資料や、話題の映画DVDや検定試験問題集など、みなさんの学習に役立つものが見つかると思います。外国語に関する資料であれば、購入希望を出すこともできます。必要な検定の書籍や、見たいDVDなどがあれば希望を出してください。



【ランゲージセンター】

映像資料は、LLメディアルーム、シアタールームなどの充実した設備を利用して視聴できます。また資料の貸出制度もあります。在学中どんどん活用してください。

当センターを利用している学生の声をご紹介します。(一部抜粋)

☆テキストもDVDも豊富にそろっていますので、語学の勉強にも、空き時間の活用にも最高の場所だと思います。(文学部4年)

☆受付の方も優しいので利用しやすいです。(文学部4年)

☆自習環境も静かなので、空き時間に休憩も勉強もできおすすめです。(文学部3年)

2. 英語・中国語 e-ラーニング(アルク)

パソコンで取り組む英語・中国語のWeb学習システムです。ネット環境が整っていれば、24時間いつでも無料(※在学中のみ)で利用することができます。英語5コースと中国語1コースがあります。

リスニング力とリーディング力をバランスよく高めたい、語彙力を増やしたい、TOEICの試験対策や高得点を目指すなど、目的に特化したコースで効率のよい勉強ができます。

ランゲージセンターにもパソコンを3台備えています。授業の空き時間などを利用して、eラーニングを勉強することができます。ぜひ利用してください。

3. Language Café

ネイティブスピーカーの教員と気軽に外国語を学ぶのが Language Café です。お昼休みはランチをしながら、夕方は様々なアクティビティを交えて話すので、自然とコミュニケーション力が身につく、語学力も高まっていきます。学部・学年を超えた交流も広がっています。

開催日時は次の通りです。ぜひ気軽にお越しください。

言語	昼休 (12:40~13:15)	夕方 (16:40~適宜)
English	月・火・水・金	月・水・金
中 文	火	
Français	金	火 (※隔週水に CINÉ CAFÉ 開催)

Language Café 参加者の声をご紹介します。

(一部抜粋)

～ English Café ～

☆ Language Café は英語で会話できる場所です。違う学部の学生やネイティブの先生と気軽に会話をして過ごしています。いろんな人と交流を深めるいい機会だと思います。(文学部2年)

☆授業とは違いとてもカジュアルな雰囲気です。毎日来ることで英会話力がアップします。(文学部2年)

☆授業ではなかなか話せない先生と趣味や週末の過ごし方などを話すことができ、楽しいです。その中で自分と同じ目標を持った友達と出会えるので素晴らしい場所だと思います。(文学部2年)

☆英語で話すことが、学校の授業以外で初めてだった私もだんだん緊張感がほぐれて話せるようになってきました。(文学部1年)

～ Café Français ～

☆フランス語が分からない時に上級生の方が教えてくださったので、1年生の時でも楽しむことができました。歌を聞いて歌ったり、映像や動画を見ることでフランス語を身近に感じることができ、参加して良かったなと思っています。(文学部2年)

☆Café Français はフランス語ができなくても大丈夫です。先生が写真などを見せてくれて、楽しむことができます。(文学部2年)

～ 中文茶座 ～

☆中国語を話せなくても、先生が紙に漢字を書きながらやさしくおしえてくれます。

(文学部2年)

☆中国語が分からなくても、中国や中国語に興味があればおすすめです。友人もできます。気楽に参加してみてください。

(地域政策2年)



【Language Café in 2017】

2018年度 外国語検定試験奨励金のご案内

言語	名古屋校舎		豊橋校舎	
	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定 (英検)	準1級以上	実用英語技能検定 (英検)	2級以上
	TOEIC	650点以上	TOEIC	530点以上
	TOEIC S/W	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定 (国連英検)	B級以上		
	ビジネス通訳検定 (TOBIS)	3級以上		
	日商ビジネス英語検定 通訳案内士 (通訳ガイド)	3級以上 合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定 (独検)	4級以上	ドイツ語技能検定 (独検)	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定 (仏検)	4級以上	実用フランス語技能検定 (仏検)	4級以上
	DELFS・DALF	A1以上	DELFS・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
中国語	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	新HSK	3級以上	新HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力	2級以上	韓国語能力	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	3級以上		
日本語	日本語能力 (JLPT)	N1級	日本語能力 (JLPT)	N1級
	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上

☆中国語は現代中国学部を除きます

受付期間 名古屋校舎 2019年1月31日まで

豊橋校舎 2019年2月21日まで

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生 (協定留学生・大学院生・オープンカレッジ生等は除きます)



Aichi University Lingua No.11 正誤表

【Aichi University Lingua No.11】(2017年12月発行) 12ページ10行目

誤) Институт Маркса – Энгельса – Ленина – Сталина при ЦК КПСС

正) Институт Маркса – Энгельса – Ленина – Сталина при ЦК КПСС

〈編集後記〉

本号では伊藤勳先生の肝煎りにて一水会委員の青木年広画伯の絵にて表紙を飾らせていただきました。青木先生の広やかなご好意に深く感謝するものでございます。

煌めく玉稿の中の大学とは教員と学生の組合であるという旨の論述に目が留まりました。羽仁五郎『都市の論理』の中にそのような記述があったことを思い出し、その箇所を見ると同著者の岩波新書『都市』の中に論拠があることを知り、そこを開くとそれはドイツの法制史家マウラー Maurer の *Geschichte der Städteverfassung in Detuchland* (名古屋図書館所蔵フーパーコレクション) の第2巻 282-321頁、第3巻 57頁の箇所に拠るものが分かりました。これこそヨーロッパの大学史の古典的著作であることを今回初めて気づかされ、羽仁はこの髭文字の本を難なく読みこなしたのかと想像すると、感無量の思いになりました。古典、撫で親しむべき哉！ (N.K.)